

# MASセミナー第9回

「日本の街並はなぜ美しくないのか」

「くらしをどう取り戻せるか」

都市開発は何をもたらしたのか

一公的経済論理で進められる私的な住い方の行方

巷 巷 巷 巷 巷 巷 巷 巷 巷 巷



建築の経済学から！



住民にとっての  
有益なプロとは



大分くたびれたマイカーが新車にチェンジされたとき、幼かった子供達は引かれてゆくるまを泣きながら見送っていました。くるまや家といった生活を共にしているものはその人の歴史の一部で大切な思い出のつまったものでしょう。ましてやこれが街ぐるみでの開発となれば様々な角度から検証されるべきで、議論を深める住民の意識こそが街を作っていくうえでなによりも基本でしょう。プロはそのことを引き出してこそ血の通った街が見えてくることになります。

今井 均

日本人らしい新しい都市開発を



建売住宅風も何となくいやだけど、高層ビルにも住みたくない……。ならどうすればいいんだ、という所で判らなくなる。特に高度成長期以後の都心では、個人の土地所有者は本当はどのように住みたいのかを見失ってしまったようです。

超高齢化が進み、人口減少社会を迎える都心の居住者の住まいは？ 緑、土、自然にもっと近づけないのか。企業ベースで計算し、効率と収益率アップ優先で進められるパターン化した都心開発だけではもう夢が持てません。

熱意で見劣らず、収益で混同しない、新しい都市開発が急務です。

大倉 富美雄

人間として生きる原点



歴史的にいくつかの革命を経て今の私たちの社会があります。農業革命、都市革命、産業革命などのほか、物々交換から貨幣社会へ、輸送手段の発展による脱地産地消社会、大量生産・大量消費等々。そして文明の進化と呼ばれるものがこれらに伴いました。これは取りも直さず人間のあるいは人間集団の欲望を叶えるということと表裏の関係から出てきたものです。しかし科学により究める真理、効率の高さの競争、欲望を呼び起こしてまでの供給過剰社会が果して私たちに幸福をもたらすのでしょうか。“くらし”と言う、人間として生きる原点からこのことを考えてみたいと思います。

鈴木 理巳

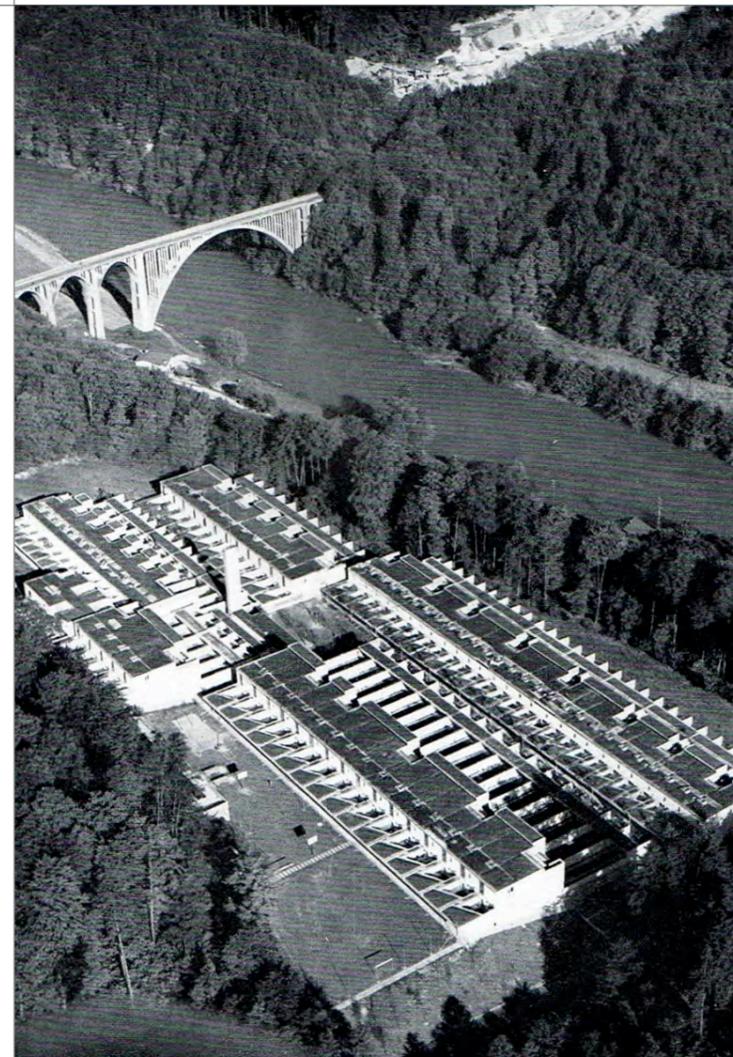


共生都市をめざして



人類が「地球に住まわせてもらう」と認識すべきです。それは自ずと「コンパクトに住まねばならない」となり、マンハッタンに対抗した「輝く都市」に似た開発行為が時代遅れと気付くはずで、自動車やエレベータ等機械のスケール感で創られた都市は機械に侵され、コミュニティが崩壊し不幸な奴隷都市になりました。「機械の時代から生命の時代へ」と黒川は提唱しました。地球に頭を垂れた共生都市は幸福な都市へと導いてくれます。

田中 俊行



住人の気持ちを取り入れた計画が  
味わいのある街を創る



味わいのある都市・街とはどのようなものであろうか？ それぞれの場所性が感じられる所と考えます。そこは歴史や文化、住み手の生活や習慣が感じられる継続性のある有機的な場と思います。それに対し、大規模都市開発はデベロッパーの経営的、経済的理由と安全・安心・防災という一見、正しく思える理由で、街を壊し、無機的、無特徴な街をつくってきたのではないのでしょうか。住人の気持ちを取り入れた開発でなければ、けっして継承性を持つ味のある街は生まれないと考えます。

連 健夫(むらじたけお)